

<エッセイ>

『万葉集』の学びと人文学への誘い

Learning from the Manyoshu: An Invitation to the Humanities

宮田愛萌

Manamo Miyata

よく「好きなことを仕事にしているすごい」と言われる。嬉しいのだけれど、私は好きなことを仕事にするしかなかったタイプの人間であるだけなんだろうな、ということを考えている。

私が日本文学を学ぼうと心に決めたのは中学生の頃だった。子どもの頃から本が好きで、誕生日プレゼントもクリスマスプレゼントもお年玉もすべて本を選ぶような子どもだった。だから将来は本にまつわる仕事をしようとするのは自然な流れであっただろう。そして、本にまつわる仕事に就くにはどうしたらよいかを考えたときに、文学部に行こうかなと思ったのだ。中学生の女の子が、行こうかな、なんて烏滸がましいけれど。そして、勉強があまり好きではなかった私が唯一楽しいと思っていたのが古典の授業だったので、進路希望学科をあっさりと決めた。当時、神社と妖怪が好きだったこともあってこれまたあっさり第一志望校が決まり、希望通りそこに合格をした。そして紆余曲折の末、今は本と近いところで仕事をさせてもらっている。

絵に描いたような成功体験だと思う。

ある時、友人が「好きなことは嫌いになりたくないから仕事にしない」と言ったときに、私はびっくりしてしまったのだけれど、たしかに好きなことを仕事にしないという選択肢もあるのだ。公私を分ける、というような考えに近いかもしれない。

学生時代にやったアルバイトは、お菓子作りと接客が好きだからという理由でピザ屋さんとパン屋さんだった。アイドルが好きだからアイドルになったし、本と言葉が好きだから今も文章を書いて生きている。だから私はずっと好きなことしかしていない。好きなことしか出来ない。この生き方は、人からよく褒められるし、まるで成功例のように語られることもあるけれど、私としては劣等感に似た気持ちを抱くことがある。現代的な言葉で言うと、チャラついた生き方だな、と思っている。

私が大学で万葉集を学ぼうと決めたのは高校三年生だった。大学のオープンキャンパスで行われていた模擬授業が偶然万葉集をテーマにしている、それが面白かったというだけだった。万葉集、というよりも、短歌、というものに苦手意識があったのだが、その授業を受けて、短歌って面白いのかもしれない、という考えに変わった。それまでは枕草子を勉強して、いつか私の訳を作ることが目標だったのだが、万葉集を勉強してもっと知りたいと思うようになった。

万葉集とは現存する日本最古の歌集とされ、誰によって編纂されたものかすらもはっきりとわかっていない歌集である。全部で二十巻あり、四五一六首の歌が収録されている。万葉仮名という文字で書かれているため、今でもなんと読むのかははっきりとわかっていないものもある。作

者についても、天皇や農民など幅広い人物によって読まれた歌が収録されている。万葉集に収録された歌は、挽歌という人の死にまつわる歌、相聞という親しい間柄で交わされた歌、そしてそれ以外を指す雑歌の三種類に分けられている。

私は大学では花や空にまつわる歌を好んで読んでいた。これは「雑歌」にあたる。

特に花の歌が好きだった。当時の人が見ていた花を私たちも見られると思うのが面白かったからという理由のほかに、今でも私たちは花言葉に思いを託して人に花を贈るが、それは歌を送る行為に似ていると思っていたからだった。当時の私はアイドルをしていて、応援してくださるファンの方からたくさんお花をいただいていたからかもしれない。花言葉に想いを託す、という行動は私にはとても身近で、自然な行動だったのだ。

そうして歌に残された想いを、何百年、何千年後の私たちも受け取ることが出来るのも魅力のひとつだと思う。

万葉集を学ぶことは、私にとっては、アニメを見ることやアイドルのライブに行くことと同じようなものだった。SNSを見ていたらあっという間に三時間が経つように、図書館で資料を見ていたらあっという間に時間は過ぎる。文章を書くことも同じで、私が読みたいものを読みたいように書いているに過ぎないのだ。

私は好きなことしか出来ない性質を持つ人間であるが、それは特別ではない事も知っている。世の中にはただ二通りの人間がいるに過ぎない。私のように好きなことしかできない人間がいる一方で、器用に色々なことが出来てしまうがゆえに、特に好きだったわけではないことをやっている人間がいるだけなのだ。

そう思うと、好きなことをずっとやり続けている私がすべきことは、偶然私と同じように好きなものが文学だった人のために、文学に関わる場を広げるための活動なのだろうと考えている。元々キリスト教の中学高校に通っていたこともあり、奉仕の心や人のために何かをする、ということが身近だからなのか、もしくは己の抱く劣等感からか、社会貢献したいという気持ちを持ち続けている。

いつどこに行っても「本屋が減っている」「文学部が縮小している」「日本文学科が無くなりそうである」ということを聞く。聞きたくなくても聞く。だから私は大学時代の楽しかった話をするし、万葉集の話をするし、短歌を詠む。バタフライエフェクトという言葉が好きだ。私の行動すべてが何かに繋がっていると信じられるから。小さなことかもしれないけれど、私のこの文章が、誰かの心にほんの欠片でも残って、その人が本を一冊読むかもしれない。文学部へ進学をするかもしれない。万葉集に興味を持つかもしれない。私と同じように、文学に関わる場を広げようとするかもしれない。そして、その人達の影響でまた誰かが日本文学に興味を持つかもしれない。文学に携わる人の働き口が増えるかもしれない。

この文章も、そう願って綴っている。万葉集で学んだことは、想いは残る、ということだ。

あなたの心になにか残すことは出来ただろうか。